

令和5年度 教育・保育実践コンパスレポート

～乳幼児教育支援センター事業報告書～

私たちの教育・保育をもっと楽しく！



世田谷区乳幼児教育支援センター

— 目 次 —

I. モデル研究報告【学び舎を起点とした幼保小中連携の充実】

【優郷の学び舎】弦巻小学校・	2
【桜咲く深緑の学び舎】さくらしんまち保育園・	4
【みしまの森学舎】三島幼稚園・	6
【世田谷杜の学び舎】若林小学校・世田谷保育園・	8

II. モデル研究報告【園の教育・保育の評価（自己評価を中心として）】

希望丘保育園・	10
給田幼稚園・	12
成育しせい保育園・	14

III. 実践充実コーディネーター派遣事業報告

上北沢保育園・	16
上祖師谷保育園・	17
上祖師谷南保育園・	18
砧幼稚園・	19
クラルテ保育園・	20
駒沢保育園・	21
駒沢ほしにねがいを保育園・	22
桜保育園・	23
春光幼稚園・	24
春明保育園・	25
新町保育園・	26
世田谷はっと保育園・	27
つむぎ保育園・	28
ナオミ保育園分園ぶどうの木・	29
西弦巻保育園・	30
馬事公苑ひかり保育園・	31
船橋東保育園・	32

IV. 令和5年度乳幼児教育支援センター事業実績・ 33

I. モデル研究報告【学び舎を起点とした幼保小中の連携の充実】

【優郷の学び舎】世田谷区立弦巻小学校

連携を適切に構築するための研究

講師：武蔵野大学 箕輪 潤子氏

1 はじめに

「就学前教育と小学校教育との円滑な接続が求められている」中で、令和5年度は、園児と児童が直接交流できる機会を設定し、適切な連携の構築を試みた。

2 「優郷の学び舎」の構成（中学校1 小学校2 幼稚園2 保育園7）

弦巻中学校 松丘小学校 弦巻小学校

区立松丘幼稚園 区立弦巻保育園 区立東弦巻保育園 区立西弦巻保育園 さくら幼稚園

いいほいくえん用賀 世田谷いちい保育園北ウイング・南ウイング マリアの家保育園

3 実践事例（1）

「おもちゃランドへいらっしやい会」 12月5日（火）

1年生の生活科の学習「あきといっしょに」の中での取組み

学び舎の所属の園に招待状を送る。

<学習の流れ>

- ① 秋のものについて知っていることを話し合う。秋にやりたいことを決める。
- ② どんぐり拾いの計画を考え、駒沢公園へ出かける。
- ③ どんぐりで「どんぐりゴマ」「アニメのキャラクター」を作る。（自分で楽しむ）
- ④ 招待する園児を意識して、作りたいどんぐりを使ったおもちゃを考える。
- ⑤ 作りたいおもちゃごとにグループを編成し、製作に取り組む。
- ⑥ おもちゃランドの計画を立てる。
- ⑦ リハーサル→本番

<当日の活動> 12月5日 2時間目から3時間目

1年生を二つのグループに分けて、おもちゃの店をひらく児童と園児を案内する児童が交代で活動した。当日4園の参加があったので、2時間目と3時間目で2園ずつに分け、各クラスを回りおもちゃで遊んでもらう活動を行った。

<当日の児童・園児の様子から>

- ・自分たちのつくったおもちゃで遊んでくれてうれしかった。
- ・たくさんお客さんが来てくれてうれしかった。
- ・お客さんがよろこんでいてうれしかった。
- ・友達の作ったおもちゃで楽しく遊べた。
- ・1年生が作ったおもちゃがすごかった。
- ・いろいろなおもちゃがあって楽しかった。
- ・また来てほしい。またやりたい。

<小学校の担任、参加園の先生方・保育士の方から>

- ・コロナ禍のため小学校へなかなか伺えなかったので、今回の機会はありがたかった。
- ・児童と園児の直接交流ができてよかった。
- ・1年生が作ったおもちゃが素晴らしかった。



- ・卒園児の成長した姿をみることで、うれしかった。
- ・1年生が、相手意識をもって活動したことで充実感を得られた。
- ・園児が楽しんでくれたので、1年生は達成感を得られた。またやりたいという声が聞かれた。

4 実践事例（2）

「ようこそ！ つるまき小学校への会」3月5日（火）実施予定

1年生の生活科「もうすぐみんな2年生」の学習の中での取組み 学び舎所属園に招待状を送る。

1年生が、新1年生に対して小学校での学習や生活についての体験を伴った紹介を行う。

現在、内容については学習の中で1年生が企画中である。

例）ランドセル体験、鉛筆で字を書く体験、鍵盤ハーモニカの演奏の鑑賞など

※参加できなかった園に対しては、入学に向けてのウェルカムボードを1年生が作成し、園に届ける予定。

【交流活動を生活科の学習の中で行った意図】

生活科の指導計画の中に位置づけることで、1年生の学習をより充実させることにつながる。

交流のために特別なことを行うのではなく、以下のように単元の学習の中で行うことが効果的であり、意義があったと考える。

「あきといっしょに」→どんぐりを利用して、自分たちが作ったおもちゃを園児に楽しんでもらう
経験 相手意識をもつことで児童の学習意欲や自己有用感が高まった。

「もうすぐみんな2年生」→1年間の生活を振り返り、新しい1年生を招待して小学校の生活を紹介する活動 紹介する活動を通して自分の成長を実感できる。

5 振り返り 今後の持続可能な取組みのために

（1）直接交流の成果

- ・園児にとって 入学前に小学校の学習や生活について知ることができる
入学後には、優しい上級生がいることがわかる
→小学校への入学を楽しみに思えるように 不安の払拭
- ・1年生にとって 自分たちが頑張って取り組んだことで園児が喜んでくれた経験
自分たちより年下の園児への接し方を学ぶ
→自己有用感
上級生になる意識（異年齢交流の効果）
- ・小学校の教員 園児の実態の把握
2年生進級への指導に生かす
幼稚園での教育・保育園での保育への理解
生活科の学習の充実



（2）課題と今後に向けて

- ・移動距離の問題→同じ学び舎の松丘小学校とエリア的な分担を行っての実施の検討を行う。
- ・実施時期や内容の検討→園との共通理解を進める。
- ・小学校のカリキュラムへの位置づけの明確化→特別なことを行うのではなく、教科・領域の中で行う。（カリキュラムマネジメント）

1 <年長児による深沢小学校見学>

深沢小学校からお声がけ頂き、『学校探検』として年長児20名を受け入れて頂きました。1年生の2クラスに10人ずつお邪魔して、大変有意義な時間を戴きました。

<当日のプログラム>

- ・副校長先生よりご挨拶
- ・授業体験(写真左/席に座って算数のプリントに記入させてもらう。)
- ・1年生からの学校紹介(学校生活について説明してもらう。)
- ・1年生からの絵本の読み聞かせ(スライドに映した絵本を読んでもらう。)



学校内を見学させて頂くことは過去にもありましたが、教室の席に座り、模擬的に学習の体験をしたり、学校生活についてお話を聞いたりすることは初めてでとても良い刺激を受けました。何よりも1年生の児童と直接触れ合い、優しく接してもらったことで安心感を得ることができました。

2 <交流の課題の整理>

学び舎を起点とした幼保小中連携という今事業について有識者の箕輪先生にご相談しました。

- ・幼児が直接学校に行くには距離がある。園と学校双方の予定の調整が必要。
- ・学校がたくさんの園と連絡を取ることの負担を考えると、一つの園が取りまとめて学校と連絡を取る窓口になった方がよい。園同士の連携も必要。
- ・学び舎だからできることもあれば、学び舎の枠組みを超えた方がやりやすいこともある。



3 <卒園以降の子どもの育ちを意識する>

卒園児にボランティアに来てもらう取組みを始めました。(1)保護者のネットワークを通じて情報を拡散してもらい、(2)園のHPから保護者に申し込みをしてもらい、(3)卒園児が選んだ学年でボランティアを行ってもらいました。試行的な取組みでしたが、双方にメリットがあり、大きな手応えを感じました。新たな発見は下記の通りです。



<新たな発見>

- ・ 卒園児が立派な小中学生になった姿を見て、自らの指導の在り方を見直すきっかけとなった。身の自立や周りとの協調を促す中で、ややもすると難しい課題を要求していたのではないかと自らを省みた。卒園後の発達の見通しを持てたことで、完璧を求める必要は何もないと感じた。
- ・ 食事をしながら年長児が卒園児に小学校のことを質問する場面があった。素朴な質問が飛び交い、自然体での保小の接続を見た気がした。大人が作った段取りでは子どもが構えてしまう部分があることも否めない。本当の接続とは子ども同士の関わりの中にあるということを学んだ。
- ・ ボランティアを通して職員からたくさんのありがとうをもらい、自己有用感を感じ、自分の居場所があることを感じる機会となった。また近隣の学童保育は混み合っており、その受け皿になることもできるのではないかと感じた。
- ・ あらゆる方面にメリットと可能性を感じる取組みとなった。

【みしまの森学舎】世田谷区立三島幼稚園

滑らかな接続につながる教員間の相互理解の大切さについて

講師：武蔵野大学 箕輪 潤子氏

本園では、「学び舎を起点とした幼保小中連携の充実」を研究テーマに、昨年度は幼児期と就学期の滑らかな接続を目指して、幼小交流活動の充実を図ってきました。

研究を進めていく中で、子ども同士の交流だけではなく、互いの教育についての教員間の相互理解が不可欠である、ということを感じ、今年度は教員間の連携に重点をおき、取り組んでみました。

教員間の相互理解を深めるための取組み

幼稚園保育見学一覧表配布

- ・初回の学び舎全体会で保育見学の日程一覧表を各学校・園に配布し、参加希望を記入して返信してもらう。

幼稚園教員による学校見学の日程調整

- ・学校の行事予定や時間割などについて連絡を取り合い、幼稚園が午前保育である水曜日の午後に授業見学をする。

〈三島幼稚園保育見学〉2学期に12回実施

- ・好きな遊び、相談活動、大型製作、誕生会等の場面を見学してもらう。
- ・保育見学後、感想を実施アンケートに記入してもらう。

見学にきてくださった先生からの感想

○環境面について

- ・飼育栽培している動植物についての魅力的な掲示が幼児の興味を高め、理科の学習とつながっていると感じた。
- ・製作コーナーでは、幼児が自由な発想で作ることができるように、様々な材料が分かりやすく準備され、活動しやすい環境になっていると思った。
- ・ホワイトボードを活用して情報を可視化し、幼児が活動の見通しや目的をもちながら行動できるようにしている。

○幼児の主体性について

- ・教師が「これをやろう」と決めつけるのではなく、幼児の話をゆっくり丁寧に聞いている姿勢から、その子らしさを尊重されながら集団の中で生活できていると感じた。
- ・子どもたちが「やってみよう」と思えるような優しく丁寧な言葉掛けがされていた。

○その他

- ・幼稚園での話し合い活動の様子を見て、意見をはっきり言える子、参加するだけで精一杯な子など、様々な幼児がいる中で、教師が間に入り、意思疎通を助けていた。そのような段階的な活動の先に小学校があるのだと思った。
- ・活動の前に歌や手遊びなどを導入し、幼児がわくわく感をもって活動できるように工夫されていた。

〈幼稚園教員による授業見学〉

学校の教員に大切にしていることを聞く。

授業見学で学んだこと

- ・身の回りの物の整理整頓が落ち着いた生活につながる。それは幼児期から身に付けていくべきことだと感じた。
- ・座学だけではなく、動きを取り入れたり、なりきって表現したりすることで、自分の考えを伝えることが楽しくなるように工夫されていた。幼児期においても様々な表現活動を通して、自分の気持ちをのびのびと伝えられる子どもを育てていきたい。
- ・一人一台タブレットを活用し、自分で学ぶ“個別最適な学び”と、皆で話し合う“協働的な学び”を組み合わせる授業を行っている。挙手して意見を伝えることが苦手な児童でも、タブレットなら自分の意見を伝えられる、といった合理的配慮につながっている。幼稚園でもできる形で合理的配慮を行っていきたい。
- ・幼児期から、座って聞くことが楽しいと思えるような素地、期待感を育てていくことが大切であり、そのために、話の仕方や内容を工夫していくことは、幼稚園も学校も同じなのではないかと思った。

〈教員・保育士間意見交換会〉全3回

- ・見学会の感想やアンケート回答内容の共有をする。
- ・三島幼稚園で行っている園内研究の事例を、学び舎の教員、保育士と検討する「ミニ園内研」を行い、自分ならどのように援助するかを話し合う。

意見交換会を行って感じたこと

- ・互いの教育内容を伝え合うことで、理解につながる。
- ・各学校・保育園間で教育内容は異なっても、共通の考えがあることに気付いた。



教員同士の意見交換会

幼保小交流活動

〈交流の事前打ち合わせ〉

- ・年間計画を立て、年度初めに日程調整、内容の大まかな打ち合わせをする。
- ・活動当日の約1か月前に事前打ち合わせをする。
- ・お互いのねらい、経験させたいこと、援助の方法等を共通理解する。また、幼児の顔写真を渡し、児童がどの幼児と交流するのか、見通しや期待をもてるようにする。
- ・打ち合わせ後も気付いたことがあった場合はその都度電話連絡をする。

1年間の交流活動

6月	等々力小1年生・等々力中央保育園「みんなであそぼう!」、等々力小6年生職業体験
7月	等々力小5年生「絵本の読み聞かせ」
10月	東深沢中2年生職業体験
11月	等々力小1年生・等々力中央保育園「秋の自然と遊ぼう」 等々力小1年生「等々力フェスタ参観」 東深沢小「音楽会参観」
12月	東深沢小1年生・学舎の幼稚園、保育園「秋祭りへの参加」
5～12月	等々力小5年生「バケツ稲栽培からポン菓子作り体験」
2月	等々力小1年生・等々力中央保育園「小学校体験」 等々力小5年生「一緒に遊ぼう」 東深沢小5年生「川場ってどんなところ？」

〈事後反省〉

- ・良かったことや改善点、子どもの姿について話し合う。次年度に活かせるように記録する。

【実践事例】年長児と等々力小学校5年生 バケツ稲栽培からポン菓子作り体験まで

5年生がバケツ稲をお届け



実った稲穂を収穫



小学校で一緒にポン菓子作りを体験



～小学校の先生に聞いた！ 1年間の交流を通して～

- ・交流を重ねることで、幼児の実態が分かり、どのような遊びをしたら喜ぶか、関わる時にどこに難しさを感じるかなど、見通しをもてる。さらに、見通しをもてることで安心感につながり、自信をもって交流ができる。1回目の交流を振り返り、さらに喜んでもらうためにはどうすればよかったかを考える、という良い循環が生まれることを感じた。
- ・張り切って幼児に関わる児童の姿を見て、こんなに頑張ることができるんだということを知ることができた。また、児童自身も自分の成長を実感する姿が見られた。
- ・幼児と児童のねらいが教師間で共有でき、どこまで支援、指導をすればよいのかが明確になる。
- ・事前・事後の打ち合わせがあると、次の交流活動に活かしやすい。
- ・教員同士の顔と名前が一致していると、交流したり連絡をとったりしやすい。

幼稚園としては、1年間の活動を通して次のようなことを考えた。

幼保小中交流活動の他、教員同士の連携を意識したことで、それぞれの教育の理解とともに「違いを知る」ことにもつながった。その上で、どちらかに合わせるのではなく、その「違い」を子どもに「段差」とは感じさせず、滑らかなグラデーションになるように埋めていくことが大切だと感じた。

そのために今後は、交流活動の継続とともに、互いの指導要領・保育指針、「アプローチスタートカリキュラム」、「世田谷区教育・保育実践コンパス」などを学び合ったり、「育てたい姿」や「大切にしていること」などについて、日常的に話し合ったりできる関係を作っていくことが大切だと感じている。

【世田谷杜の学び舎】世田谷区立若林小学校 世田谷区立世田谷保育園
つなげる・ひろげる ー子どもの育みー
～学びや育ちをつなげる保小連携に向けて～

講師：武蔵野大学 箕輪 潤子氏

・昨年度のテーマ

「やってみたい な もっとやってみたい な ～幼児期教育・保育と小学校教育をつなぐ～」

- ・ねらい…保育園・小学校の課題を共有し、非認知能力の育成や円滑な接続期の在り方を研究、実践する。

昨年度の活動内容

◆取組み内容（昨年度および今年度実施）



5月 小学校へ
こいのぼり見学
・初めての小学校訪問



8月 職員交流会（情報共有）
・保育園や小学校の1日の流れ
・接続期の連携方法について



10月・11月
小学校体育発表会
音楽会の練習・本番見学
・授業や行事の取り組む姿を見る。



12月
小学校代表委員挨拶運動
・学び舎の活動を知ってもらうきっかけに…



12月 1年生交流会
・生活科の授業の一環で
お店屋さんごっこに招待してもらう。



2月 5年生交流会
・入学後に向けた関係性づくり
・グループ活動

今年度について

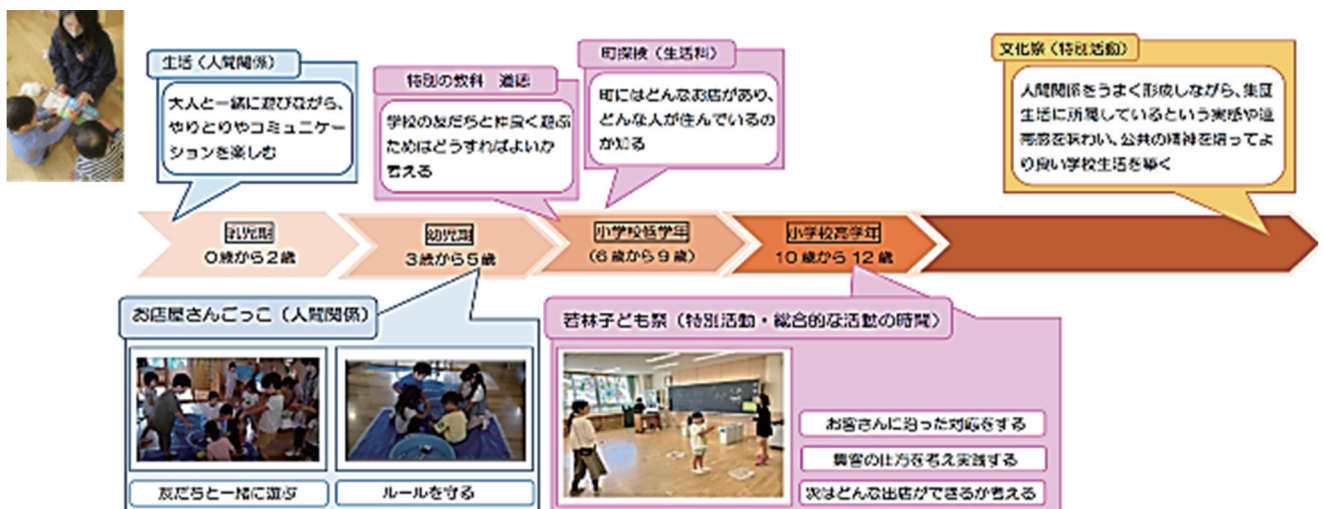
・今年度のテーマ「つなげる・ひろげる ～子どもの育み～ 学びや育ちをつなげる保小連携に向けて」

昨年度の保小連携学び舎の活動では、年長児クラスと小学校の連携を中心とした“接続期”に焦点を当てて研究および実践を行ってきた。今年度は、就学に向けた接続期だけではなく“子どもの育み”と

して0歳から12歳という子どもの育みの土台となる乳幼児期から小学校就学、そして中学校へと繋がっていく育ちを職員が共に学び、共有していくことをねらいに研究、実践を行った。

・職員交流会 … 子どもの育ちを共有する「保育内容と小学校教科の接続について」

保育園では、乳幼児期の指針となる「5領域」と就学にむけて育てていきたい「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」、そして小学校では“知識・技能、思考・判断・表現、主体的に学習に取り組む態度”の3つの柱を基礎にそれぞれの保育内容及び小学校の教科内容を習得していく。その過程は保育園・小学校と異なる部分ではあるが、子どもたち一人ひとりの育みに途切れのない援助・教育を行えるよう保育士と教員が共に学びの機会を作っていた。



＊(例) 保育所保育指針(5領域)「人間関係」と小学校教科における経験と学び

・保育園と小学校をつなごう！ ～松陰ストリート交流会～ (活動対象: 小学3年生・4歳児クラス)

3年生と4歳児で小学校と保育園の施設を繋ぐ「松陰ストリート」の飾り付けを一緒に行った。この活動を通して、4歳児は架け橋期に関わる小学生への期待感が高まるとともに、3年生においては、地域との交流を通して他者意識が広がった。活動のめあてを双方でしっかり確認したことで互恵性のある交流ができた。

<成果>

昨年度は「架け橋期」の子どもに焦点を置いて円滑な接続に向けた取組みを行ってきた。今年度は、0歳から12歳までの学びの繋がりを教職員間で共通理解を図ったとともに、交流実践を通して就学前教育と小学校教育の円滑な接続が子どもたちのより良い成長に繋がることを実感することができた。これにより、より一層保育園と小学校が子どもを共に育てていく意識付けや見通しをもつことができた。この2年間で研究実践してきたことを土台に今後も保小連携を推進する。

<0歳から12歳まで 教職員全体で保小連携するために>

今年度は4歳児と小学3年生、5歳児と小学1・5・6年生、小学校代表委員会4～6年生と幅広い学年が交流を行うことができた。これは、今年度の職員交流会で0歳から12歳までの学びの繋がりについて共通理解を図った成果である。

Ⅱ. モデル研究報告【園の教育・保育の評価（自己評価を中心として）】

【世田谷区立希望丘保育園】

子どもの（各クラスの）育ちの姿を共有し保育の質の向上につなげていく

講師：玉川大学 田澤 里喜氏

情報共有ボード（いいねボード）の取組み

◎ 年度当初の状況と課題

子どもの育ちの姿を共有し、保育の質の向上につなげていく取組みとして、希望丘保育園では情報共有ボード（いいねボード）の取組みをスタートして3年目となる。

昨年度までは、各クラスが掲示したクラス便り・ミニアセスメントシート・カリキュラム反省などをホワイトボードに掲示し、職員が付箋にコメントを記入するという方法を取り入れていた。

定着し、互いの保育を認め合い、モチベーションアップになったり、新たな気付きにもつながっている。

今年度は、希望丘保育園のイキイキわくわくとした保育を情報共有ボードも活用しながら深め、保護者と共有する事が新たな課題であった。

◎ 取組みの内容

昨年度までは、副園長・主査が中心となって情報共有ボードの取組みを進めてきたが、今年度は情報共有ボードチームを作り、職員が主体性を持って進められるようにした。

チームのメンバーを中心に実践コンパスを読み込み、今年度の課題と方向性について話し合いを重ねてきた。

保育の質を深める為には、子ども・職員・保護者の育ちの共有が不可欠となってくるが、今まで以上に保護者を巻き込む具体的な方法として、以下の取組みを実践する事とした。

（１）情報共有ボードの整理・保護者の参加

①写真入りのクラス便りのみを掲示（ホワイトボード１台目）

→クラス便りを発行する際は、保育士の思い・育ちへの願い・試行錯誤などを一言でも必ず入れる。

職員がクラス便りに付箋でコメントを掲示した後、ホワイトボードをエントランスに移動し保護者にも職員のコメントを読んでもらったり、付箋に思いを記入してもらう。



②ミニアセスメントシート・各クラスのカリキュラム反省（ホワイトボード２台目）

→職員のみが閲覧・コメントを記入。特に読んでほしいところにマーカーで線を引く。

（２）気になる本を充実させる

- ・０歳児クラスで昨年度好評だった気になる本（保護者間のコミュニケーションボード）を期間ごとに乳児クラスで順番に設置し、年度の後半はエントランスに設置して学年の垣根を越えて保護者がコメントの付箋を貼る事ができるようにする。



◎ 情報共有ボード（いいねボード）の取組みの過程

- ・ エントランスにボードを設置して1か月が経った頃、保護者からの付箋のコメントは3枚だった。少数でも反応があった事は嬉しかったが、付箋でコメントを頂く事も一つの目標としていたので、チームで集まり、今後の取組み・改善点を話し合った。
- ・ 付箋を記入してもらう工夫も話し合ったが、保護者は忙しい中でもボードに関心を寄せ、よく見てくれている。お便りを通してクラスの垣根を越えて保護者と職員の会話が生まれているなどの声があがり、今は付箋に記入をしてもらう取組みは焦らず、保護者との会話を楽しもうという方向性になった。
- ・ 取組みが期待していた結果にならなかった時にこそ、職員で思いやアイデアを伝え合えればよいという経験をする事ができた。



◎ 職員アンケートによる今年度の振り返り

- ・ チームのメンバーだけでなく、園全体の取組みとして職員がどう捉えているか、年度の後半にアンケートを実施する。各項目、8割を越えて職員の理解が得られた結果で、一歩前進できた手応えがあった。
- ・ ボードをスタートしてから、次第にクラス便りの発行数が増え、写真や保育士の思いの記述が多くなっていった。
- ・ 一方、保護者も巻き込むとボードのターゲットが広がりすぎてねらいが曖昧になる。ボードなどで様々な情報をキャッチして取り込んでいくのは、個々の意識の問題。ボードは日々掲示され、世代別会議などでも活用している。それ以上の細やかな働きかけは職員の意識を受け身な姿勢にさせてしまう気もする。どこまで働きかけるのか難しいなど、アンケートを取った事で新たな気付きや来年度に向けての課題も浮き彫りになった。

◎ これからの情報共有ボードの取組みについて

- ・ 来年度は、公表についてなども含め、保育の評価の基本的な考え方を職員全員で学びあう機会からスタートし、チームの取組みの過程を丁寧に職員に伝え、メンバー以外のアイデアも積極的に取り入れていきたい。
- ・ 情報共有ボードは子どもの育ちの姿を共有し、保育の質の向上に向けてのひとつのツールとして、職員の異動がある中でも、来年度以降もトライ＆エラーを繰り返し、一步一步、スモールステップアップを繰り返し、持続可能な取組みとしていきたい。



【世田谷区立給田幼稚園】

つながりのある保育を目指して ～振り返りを通して～

講師：大妻女子大学 石井 章仁氏

幼児期の育ちは日々の積み重ねによって培われることから、保育の中で様々な経験を積み重ね、今日から明日へ、また長期的な見通しをもって保育をつなげていくために、日々の振り返りが大切である。振り返りの観点を設定し、保育の場面の振り返りを教員皆で共有することで、多面的に幼児理解を深められる。またこれまでも行ってきた自己評価をすることの必要性を改めて意識し、実践することで、私たちの目指すつながりのある保育ができると考えた。そこで、振り返りを通して、より良い教師の援助や環境の構成を探り、遊びの充実や幼児の育ちにつなげられるよう、以下の取組みを実践した。

●今年度の取組み

1. ビデオカンファレンス

2年間を通して、継続したビデオカンファレンスを行い、日々の保育の振り返りを積み重ねてきた。事例検討の観点は、以下のように設定した。また、各学期に講師をお呼びして研究保育を行い、明日の保育につながるための助言をいただき、新たな視点で保育を振り返ることができた。

【幼児理解を深める観点】

興味・関心 自己表出 環境への関わり方
人との関わり・関係性 遊びの読み取り

このビデオカンファレンスシートは、日々の保育の様子を撮影した映像を基に、教員間で振り返りを行うためのツールです。シートには、観察、自己表出、環境、人との関わり、遊びの読み取りなどの観点から、具体的な事例とその考察が記載されています。

【観察】
・子どもたちが砂遊びをしている様子。
・子どもたちが砂を掘り、積み重ねている様子。
・子どもたちが砂を掘り、積み重ねている様子。
・子どもたちが砂を掘り、積み重ねている様子。

【自己表出】
・子どもたちが砂遊びをしている様子。
・子どもたちが砂を掘り、積み重ねている様子。
・子どもたちが砂を掘り、積み重ねている様子。
・子どもたちが砂を掘り、積み重ねている様子。

【環境】
・子どもたちが砂遊びをしている様子。
・子どもたちが砂を掘り、積み重ねている様子。
・子どもたちが砂を掘り、積み重ねている様子。
・子どもたちが砂を掘り、積み重ねている様子。

【人との関わり】
・子どもたちが砂遊びをしている様子。
・子どもたちが砂を掘り、積み重ねている様子。
・子どもたちが砂を掘り、積み重ねている様子。
・子どもたちが砂を掘り、積み重ねている様子。

【遊びの読み取り】
・子どもたちが砂遊びをしている様子。
・子どもたちが砂を掘り、積み重ねている様子。
・子どもたちが砂を掘り、積み重ねている様子。
・子どもたちが砂を掘り、積み重ねている様子。

～実践コンパスより～
『評価の取組みは、子どもの実態に即して、子どもにふさわしい経験とそのための環境の再構成を検討し、明日の保育の見通しをもてるように進めます』

【自己評価の観点】
この場面の
教師の援助

【遊びの充実に
導く観点】
経験させたい内容
環境の再構成
教師の援助

このビデオカンファレンスを教員の負担感が無いように継続して積み重ねてきている。観点の項目を再検討・再確認しながらすすめることで、観点の捉えが明確となり、共通理解することができた。またそのことで、幼児理解をさらに深められることや、教師の願い、そのための援助の方向性について、教員間で共有することにつながった。この観点は、各園で学びたいこと、目指したいもの等から設定するものであり、私たち教師の質を高めるために必要なことを教員皆で繰り返し語り合い、試行錯誤して設定、改善していくことが大切である。

公立幼稚園では、これまでも振り返り・自己評価を行ってきたが、保育の原点である幼児の姿を丁寧に分析してきたことで、改めて振り返りの大切さを感じるとともに、それぞれの教師の保育の価値観で分析するのではなく、観点を共通にすることで気付かされることが多くあった。また、教員数が少なく、かつ担任の入れ替わりが多かった本園の実情においても、この振り返りシートを活用しながら、互いの考えを受け入れ合い、教員皆で保育を語ることで、幼児理解を共通にし、連携を深め、さらに保育の楽しさを感じることに繋がった。

2. 週案の自己評価の項目の作成

歳児 組	月 期 週 月 日 ~ 月 日	宮田谷区立給田幼稚園	園 長	教 員	教 員
幼児の姿態（遊び・人との関わり・生活）	週案				
	自己評価				
園の生活（一日の生活）	自己評価				

～実践コンパスより～
『子どもの理解を深め、実践を省察し、改善につなげていくために、保育の記録を適切に行い、有効に活用していくことが重要です』

	日（月）	日（火）	日（水）	日（木）
園の生活（一日の生活）	日の記録			
	自己評価			

自己評価の項目を設定し、教師が幼児の言動や様子と保育の振り返り（自己評価）を分けて記入することで、より自己評価として意識して保育を振り返ることができた。そして幼児の姿の捉えが深まり、次の手立てが見えてくることにつながった。また、週案の中にこの項目があることで、担任以外の教員にも、子どもの実態、自己評価を受けたねらいや援助の方向性の共有化を図ることができ、チームで保育をすすめる上で有効であった。

3. 地域や保護者への公表

令和4年度は給田小学校との合同研究会、令和5年度は本園の保護者会において、具体的なエピソードを使ってモデル研究の取り組みや、保育で大切にしていることを伝えた。今年度の保護者会では、保護者から「今日の話聞いて、『なるほど、だからどの先生も子どもたちのことをよく分かってくれているのだな』と思った」「先生方がプロ意識をもって、温かく指導してくれていることが分かった」等の声が聞かれた。また、園評価アンケートにおいても、教員間の連携を評価する回答が多く、園の教育に対する安心感や信頼感につながったことが感じられた。

～実践コンパスより～

『園の教育・保育の理念や方針と大きな道筋（グランドデザイン）を家庭や地域と共有していくことは、園の教育・保育への理解を促進するとともに、改善への取り組みにもつながっていきます』



●研究の成果

- 多様な観点で幼児の姿を捉え、一人ひとりの幼児理解が深まり、遊びの充実に向けた個々に応じたよりよい援助と、明日につながる援助が明確になった。
- 一人ひとりの幼児理解が全教員で共通になり、同じ願いをもって子どもたちに関わり、チームで育ちを支える連携作りにつながり、そのことが本園の強みであると分かった。

公立幼稚園にとって、これまで個々が日々の保育の中で様々な形で行ってきた振り返り・自己評価を、幼稚園全体で丁寧に実践していくことで、教員間の信頼関係の構築につながり、連携が深まっていく。そして、さらにそのことによって、結果としてチーム全体の保育の力量があがり、保育の充実につながることを実感した。

今後もこれまでの取り組みを幼稚園として組織的に継続し、保育の楽しさや奥深さを感じながら教員同士の連携を深めていきたい。また、幼児や教師にとって明日の保育が楽しく充実したものになるように、そして幼児のさらなる成長につながるように、今日の姿を明日へつなげる保育を展開していきたい。

【社会福祉法人至誠学舎立川 成育しせい保育園】

主体性を発揮する職場環境 ～新自己評価作成の取組み～

講師：昭和女子大学 遠藤 純子氏

これまで、毎月の職員会議で自己評価（各室の報告書）を作成、伝達をしていましたが、大事な内容ではあるものの全体で活用しきれていない、もっと活用できるような報告書を作っていきたいと考えました。日頃から職員が子どもの姿を伝え合う姿から、語り合う機会を作りたい、自己評価の作成の中で実現できるようにと考えました。そこで、毎月の報告書である自己評価を整理し、活用できる内容を見直す取組みを実施しました。そしてもう一度「自己評価」の意味について学び、子ども、保育の理解につなげていこうと職員間で共有していききました。

モットー

子どももおとなも 生き生きと

～ 思いやり・信じあい・共育ち ～

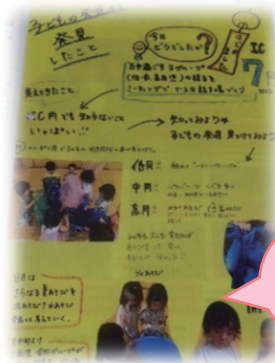
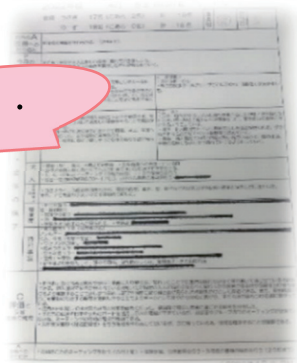
2年間の取組み・・・

令和4年7月～11月 形にとらわれず、作ってみよう！

内容を整理してみよう！保育・子どもの理解を深めよう！子どものこと、保育のことを語り合おう！

職員発信を大切に

文字ばかり・・・



写真を
載せて・・・

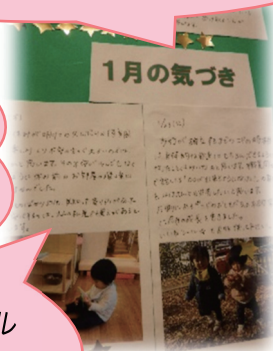
令和4年11月 振り返り・・・ 12月～振り返りの内容をもとに引き続き進めていく

語り合う時間は作れている？ という点を中心に各室の自己評価の作成の仕方などの振り返りを実施。

今月の保育士からの気づき

教育・保育実践コンパスの活用
園内研修…子どもの人権、適切な保育、
モンテッソーリ実践研修
職員発信…子どもの気づきの掲示

☆いいねシール
ゲット！



2年目に向けて・・・

・ 語り合いの会を実施 ・ 自己評価を引き続き進めていく



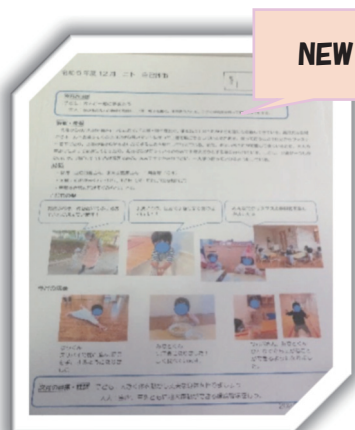
～語り合い～
誰もがほっとした気持ちで話せる場
自分では意識していなかった良いところへの
気づき、新たな見方



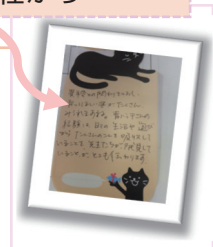
・ 令和5年9月～ 職員会議では、保育エリアの報告時間を長くとり、保育への思いを伝えあう。

・ 令和5年11月 2年間の取組みの振り返りを全職員と実施。

園長、主任から・・・



取組み1年が過ぎ、評価への理解が文面でも
見られ始める。他の書類、日誌、週、月案等の
指導案にも評価のとらえ方や文章が変わり、
読み手にも保育内容や現場の職員の思いが
伝わる内容が見られ始めた。提出書類の内容のフィードバック
を園長、主任側もエリア側に発信することを大切にしていこう。



2年間の取組みを振り返り・・・ 職員の声

- ・ 自分の思いを伝える機会が増えた。・ エリア内での大切にしていきたいことを共有できた。
- ・ 親しみやすい自己評価ができ上がった。・ 評価の意味をあらためて学んだ。
- ・ 業務の負担が軽減された。・ 子どもの姿をよく話すようになった。
- ・ 写真を通してより保育を伝えやすくなった。・ 保育の振り返りをする事の大切さをあらためて感じた。・ 言語化することで、保育を整理することができた。
- ・ はじめは混乱もあったが、進めていくことで、自分たちの保育を話す機会も増えた。
- ・ 感じたこと、気づきを形にとらわれず、話す機会ができ、振り返りがしやすくなった。
- ・ 日々よく子どもの姿をみるようになった。・ おたより等連動できるようにしていきたい。
- ・ 自分の保育のヒントをもらえたり、課題がみつかり、やる気につながった。

これからも・・・ またその次へ・・・

語り合いの会の実施	自分の思いを伝える	他者の思いを感じる
自己評価を深める	子どもの姿を感じる	気づきを次につなげる
保護者との共有	毎月のおたよりから	日々子どもたちの姿から
業務の見直し	自己評価を毎月のおたよりへ	ICTの本格的な導入

Ⅲ. 実践充実コーディネーター派遣事業報告

世田谷区立上北沢保育園

園内研修（運動遊び、積木遊び）の取組みの充実

コーディネーター：大妻女子大学 坂田 哲人氏

◎年度当初の状況と課題◎

幅広い年齢層の職員が経験を活かし、刺激しあえる関係や課題検討を行っている。継続的に年代別構成での行事やじっくりトークに取り組むことで、意見が言い易い環境を築いてきた。

今後の課題として、子どもを中心とした保育の展開や、効果的な保護者へのアプローチの仕方、そこからの保育の振り返りや改善につなげる流れを学び、保育の質の向上につなげたい。

◎取組みの内容◎

- ・各職員が「やりたいこと」「学びたいこと」それぞれの思いを発表し、園内研修の方向性を明確にした。その意見を活かし、園内研修（運動遊び、積木遊び）充実にあたり、検討を重ねる。
- ・園内研修、通年の計画、方向性を統一、実行する。

① 記録に残す

みにぎっふ（運動）積木クラブ（積木）として、毎月各クラス掲示することを決め、実施した。

② 記録を保護者と共有する

- ・みにぎっふ（運動）積木クラブ（積木）毎月各クラス掲示するにあたり、掲示内容の検討を行い、保護者に成長のポイントや必要な経験を伝えていくようにした。
- ・成功の姿のみを伝えるのではなく、そこに至る取組み、努力している姿を伝えることも行う。（コーディネーターの取組みを保護者周知）
- ・毎月の記録を0～2歳児クラス、3～5歳児クラスのくくりでまとめて掲示する。経過が見られるようにする。

③ 振り返り

3か月ごとに掲示の内容を職員が振り返り、遊びの工夫や必要性を伝える掲示を作成する。

④ 2階テラスアスレチック設置

⑤ 縦割り活動におけるリズム、積木の取組みを実施



◎振り返りと今後に向けて◎

- ・今年度の取組みでは、コーディネーターからのアドバイスがあったことで、方向性が見出せ、自身の取組みを肯定的に捉えることが出来た。
- ・経験世代に関わらず発信する力がつき、疑問を感じたことを学び、保育に活かす姿も見られている。
- ・保護者への周知において、発信はしたが、反応が見えにくく、保護者との振り返りや共有の仕方は今後の課題として上がった。保護者への配信の中に、感想を聞き出せる方法を考える。
- ・感想や保育に対する思いを聞き出せるよう日頃のコミュニケーションを図っていく。
- ・次年度の取組みとして、今年度の反省を活かして計画を立てる。
- ・コーディネーターを介さずも自分たちで振り返り、コーディネートして保育を進められるよう意識していく。

◎年度当初の状況と課題◎

保育について語り合える風通しの良い職場作りを進め、2年ほど期間をかけて取り組んだことにより、土台はできつつあった。

職員構成比として若年層が多く、今後さらに保育の専門性を重ねていくことが重要。また、ベテラン層も自身の子ども観や人権についての捉え方を見直してみる事が必要と感じていた。

◎取組みの内容◎

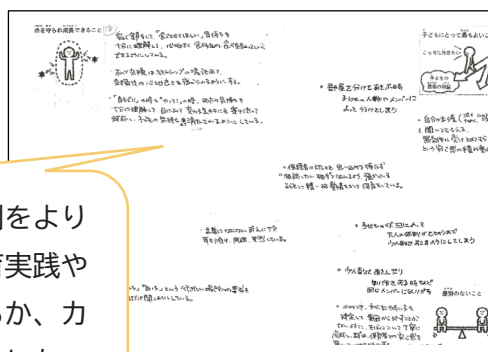
○第1回目の訪問を受けて…

今後取り組むにあたり、講師の先生に日中の活動を見てもらい、保育士一人ひとりの良さや強みをあげてもらいました。

個人振り返りシートの目標を共有してみては？
という助言を受けて、開示していききました。



権利条約の4つの一般原則をより
身近なものに！自分の保育実践や
心がけがどこに当てはまるか、カ
テゴライズして話し合いました。



○途中、行き詰まる…

考える機会を作ってきたけれど、ここからどのように深めていこう…。方向性についての相談を2回目の訪問時にしました。子どもの思いの表出は様々。大切にしたいけれど難しい時もある…、全国保育士会の「人権擁護のためのセルフチェックリスト」などで振り返るだけでは自分に落とし込めない、そんなジレンマも垣間見えてきました。“ならば、そのジレンマを開示して、職員同士で分かち合ってはどうか？自分とは異なる価値観や判断の根拠に互いに触れていくことで子ども理解が深まっていくのでは？”という助言をもらいました。

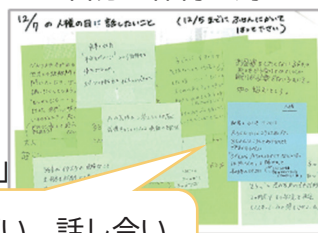
○みんなで思いを共有し合い、多角的で深い子ども理解を

そこで、「人権の日の話し合い」のテーマをそこに焦点化し、付箋で開示した自分の保育に対しての思いを取り上げながら話し合いました。「自分のことも見てほしい」という子どもの思いに対して、すぐに応えられないという悩み

「危険を回避するあまり子どものやりたい気持ちを制限していないか？」

「つい“ああ”とか“もう～”という声が出てしまった。反省」

といった正直な思いについて共有し、「こんな考え方も良いんじゃない？」と互いの意見を率直に交わし合いました。



悩みいっぱい、話し合
いたいこともいっぱい！

◎振り返りと今後に向けて◎

今回、このテーマに取り組むにあたり、「子どもの人権についての捉え方」への意識を強くし、それにより保育士としての専門性を深めていくことを目的に…としてきましたが、取組みの中で「不適切保育」とならないようにするには…など、「～すべき」「～してはいけない」などの「べき論」にうっかり偏りがちになっていることへの気づきがありました。それぞれが考えていること、心がけていることを開示し、共有しあってみると個人が抱える保育の援助に対する行き詰まりが解消され、新たなコミュニケーションについてのひらめきを得ることが出来ました。「不適切保育を行わないために」ではなく、「子ども理解に肯定的な文化を構築する」視点を持つことで、子どもの権利が尊重された保育のベースとなる職場の同僚性の向上、そして専門性の向上に今後も取り組んでいきたいと思えます。

子ども主体で保育者も楽しんでいける環境づくり

コーディネーター：和泉短期大学 松山 洋平氏

◎年度当初の状況と課題◎

- (強み) ・虫や草花に興味・関心があり夢中で探す子ども達の姿を見て、子ども達が自由に遊びに使える草花や身近な虫などに出会えるように環境づくりのチームを作った。
・保育者が子どもに合わせた保育環境を整え保育を楽しみたいと考えている。
- (課題) ・昨年度は草花コーナーでの子ども達の姿を共有しきれずに計画を振り返りに活かしきれなかった。乳児を含めた全園児が身近に自然物と関われるようにするための環境づくり。
・職員もより保育を楽しみ、子どもの主体性を引き出す工夫をしていくこと。

◎取組みの内容◎

①草花コーナーづくり

子どもが自由に触れ、自然を身近に感じられる環境づくりを園庭の奥を中心にを行った。また、けやきの木の下にプランターを置くなどの工夫を行った。



春～夏…子ども達が土作りに参加して、雑草が根付いてきた頃「先生、バッタがきたよ！」と目の色を変えて喜ぶ姿があった。道を作ったことで探せる場所も増える。



「このお花取っていいんだって！」「見て～たくさん取れた」「パーティーしよう」と砂で作った料理の上に花びらを並べる。



冬…草花は枯れるが、「先生見て！氷がある」と霜柱を発見。触ってみたり踏んでみて「土の氷！」と五感で楽しめる冬の自然に出会った！

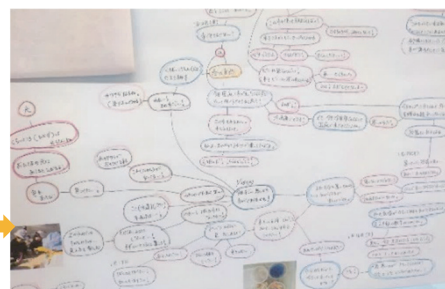
②3歳児クラス ～氷の発見からオリジナル氷づくりへ

・**子どもの姿** 「先生大発見！氷ができてる！」「見て！アイスクリームになった！」「(いろいろな角度から)なんか違って見える」「(凍ったたわしを発見して)ぼこぼこして面白い」

・**保育者の思い** 子どものつばやきや気づきを大切にしたい！ウェブ作りをしてみることにした。

・**保育者の変容** 担任は子どもの小さな発見に耳を傾け、色水や氷づくりなどを一緒に楽しめるようになった。

・**保護者とも共有** ウェブの周りに写真を貼って掲示し、子ども達と保育者が一緒に楽しんでいることや、活動の中で感じた子どもの育ちを保護者に示し、その達成感や充実感を共有した。



◎振り返りと今後に向けて◎

振り返り ○子どものつばやきから広がる活動の面白さや、つばやきを通じて、保育者と子どもの成長を共有できることに気が付き、つばやきの大切さを感じた。○大人の意識が変わると子どもたちの興味が広がっていくことを感じた。○草花コーナーという小空間をはじめ、環境の工夫をすることで子どもと共に身近な自然に気づいたり探求したりすることができた。

今後に向けて ○今後、つばやき(気づきや興味関心)をいかに環境構成や共感的な援助により支えていくか考え、子どもの具体的な姿から保育を計画していく。○子どもと共に保育者自身がわくわくすること・面白いことに目を向けていく。○子どもたちが触れて遊べるような草花を移植したり、育てたりし、工夫をして自然を身近に感じられるようにしていく。

遊びこむ楽しさを味わう中で考え、試し、工夫する幼児を育むために

コーディネーター：目白大学 荒牧 美佐子氏

◎年度当初の状況と課題◎

年度末の自己評価（内部評価）で、園児の課題を「困ったことや自分の思いと異なることがあると粘り強く遊びを続けず、違う遊びに移りがち」と話し合い、今年度の園内研究のテーマを「遊びこむ楽しさを味わう中で、考え、試し、工夫する幼児を育む」とした。様々な遊びの場面を捉えながら、考え、試し、工夫しながら遊ぶ楽しさを味わえるように保育環境や援助を見直していきたい。

本園は園児数に対して大人の人数が多く、安心して過ごせるが、すぐに大人に頼りたくなる環境である。その状況を改善していきたい。

◎取組みの内容◎

○改善、充実に向けた検討

荒牧先生からのご助言を受けて以下のことが分かり、実践につなげた。

- ・ 幼児が「自分の力で考えたり、試したり、工夫することを楽しみながらじっくりと遊ぶ」ためには、幼児一人ひとりの遊んでいる場面での姿や幼児の思いを丁寧に捉え、援助することが更に必要である。
- ・ 補助員などの職員全員と、めざす保育について共有し、意識を高め、職員全員の力をもっと生かせることよい。保育について共有するために、掲示板を活用する方法を用いることが有効である。

○今回の取組みのねらい

職員全員で幼児一人ひとりの思いや姿を捉え、情報を共有し、考えたり、試したり、工夫したりしながら遊ぶ楽しさを味わえる保育ができるようにしていく。

○実践したこととその経過

1. 職員全員が幼児の遊ぶ姿を出し合い共有する掲示の場を設置する。

（写真①：全紙に園の略図を書いたものに、幼児の遊びの姿を付箋に書いて貼る。

およそ1か月ごとにスケッチブックに整理し、写真②：いつでも見られるようにしておく。）

- ・ 職員が取組みやすいように、まずは「幼児の遊んでいる姿で、他の職員に伝えたいこと」を記入することにする。

⇒様々な観点からの遊びや、幼児の姿が記入されていた。今回のねらいにはつながりにくい
が、職員の遊びに対する様々な捉えを知ることができた。

2. 掲示に書いてもらう内容などの見直しをする。

- ・ 再度、ねらい・意図をしっかり伝え、書く視点『幼児が考えたり、試したり、工夫したりすることを楽しみながらじっくりと遊ぶ』をより明確にし、記入してもらう。

- ・ 遊びのカテゴリーに分ける。（表現・自然・製作…など 目で分かるようにシールを貼付）

⇒書かれている内容が変化。幼児の考えたり、試したり、工夫している姿が、掲示をきっかけに話題に上るようになってきた。（職員の意識が変わってきている。）

※気づきを伝え合うことで、幼児の姿を多面的に見ることができるようになった。

※みんながより感性豊かに子どもの姿を受け止められるようになった。

※援助の仕方、幼児への関わり方に変化が見られるようになってきた。

○取組みを通して見えてきた園の強み

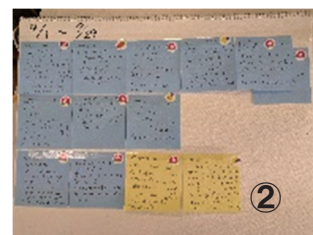
職員全員が自分たちのめざす保育を共有し、同じ方向に向かって意識をもち保育をすることで、質の高い教育につなげていくことができる。

○今後の公表の方法

学級懇談会などで、この実践を通しての幼児の姿や育ちを伝える。

◎振り返りと今後に向けて◎

今回、コーディネーター派遣事業を受けて、幼児の育ちに向け、全職員の力を生かしみんなで同じ方向を向いて保育をしていくことの大切さを学ぶことができた。情報が共有でき、環境や援助の工夫につながっていく掲示板は継続し、職員全員が「自分も園の教育に携わる一員である」という気持ちにつなげ、一人ひとりが主体的に力を発揮する園にしていきたい。



10の姿とドキュメンテーション

コーディネーター：昭和女子大学 遠藤 純子氏

◎年度当初の状況と課題◎

各クラス担任は意欲を持って保育に取り組んでいたが、子どもの育ちを全体で継続的に語り合う場がなかったため、経験や子どもの見方に凸凹があり、子どもの育ちと保育を共有する課題があった。

そこで10の姿について学ぶと共に、10の姿のパネルを設置して、そこにドキュメンテーションを掲示、保護者に向けてドキュメンテーションを掲示し、園での子どもの生活や育ちを見てもらい、関心や理解を深めてもらう。また、保育士はドキュメンテーションを作成する過程で子どもの育ちを語り合い、保育士間で対話を重ねる等の学びあいを通して、園全体の保育の質を上げていくようにする。0～5歳の保育の連動性を意識して、コーナー作りやおもちゃの見直しなど保育の環境を改善していく。

◎取組みの内容◎

○6月～12月（1回目～2回目）

保育士それぞれが迷いながらも、ドキュメンテーションを作ってみる。9月の「保育の振り返りの会」の機会に、皆で見せ合い語り合った。子どもの育ちを色々な角度から見合うことで気づいたことなどを参考にドキュメンテーションに手を加えて、コーディネーターに見て頂いた。新たな視点でアドバイスを頂き、保育士が気づいた視点や表現した文章を褒めて承認され、ドキュメンテーションを作っていく自信や動機づけになった。

○2月（3回目）

「10の姿」のパネルを廊下に貼り、そこにドキュメンテーションを月1回、各クラス2枚を目安に貼り、写真の子どもの姿が「10の姿」のどれと結びつくのか書いていくことにした。

しかし、1回目の試作は写真と文字数が多く、見にくい、読みにくい、との意見が出た。そこで写真の数を減らしたところ、説明するための文章が増えてしまった。さらに文字数を減らすと伝えたい具体的表現が入られない、など何度も作り直し葛藤した。最終的に1又は2枚の写真にごく短い文章を添えて「10の姿」を書いて作り直すことになった。保護者が見たい、読みたいと感じる掲示は、どこまで省いてよいのかわからなくなった。

それについて講師に助言を頂いた。それによれば、『ドキュメンテーションでは、子どもが経験していること、心の動きを保育士が共感しながら現在の子どもの姿、育ち、学びを伝えていく。そのような普段の遊びや生活の積み重ねがあって「10の姿」のように育っていくことを振り返り、他者（子ども・職員・保護者・地域等）と共有することができる。どんな心の動きがあって、ストーリーがあって、日々の経験一つ一つに意味があり、その積み重ねが「10の姿」に繋がっていく』ということ、その上で『自園の自己評価にドキュメンテーションを繋げて、園の強みや保育に価値を見出していった欲しい』とのことだった。また、『業務負担を減らすには、毎月のおたよりが育ちが見えるドキュメンテーションになっているので、中の1つのエピソードをパネルに掲示するのはどうか』とのことだった。



◎振り返りと今後に向けて◎

保育士はドキュメンテーションの作成と語り合いを継続しながら、子どもの願いや育ちを観て読み取り感じる感性を養い、表現する技術を身に付けていく。また、ドキュメンテーション等を活用して園生活を公表することで、子ども、保護者、保育者が子どもの育ちや遊びと生活を気軽に語る土壌を築いていく。コミュニケーションが増えて、園の良さや課題が共有され、そこでの語り合いが子どもの保育園生活にフィードバックし充実した豊かなものとなっていくことを望みたい。子ども、保護者、保育士がそれぞれの意見を尊重して語り合う。子どもがのびのびと自己を発揮して遊び、豊かな経験を積んでいけるような保育環境を作っていきたい。

充実した保育実践と自己評価

コーディネーター：大妻女子大学 石井 章仁氏

◎年度当初の状況と課題◎

〈課題〉

- ・保育士が持っている強みやスキルを日常の保育の中で十分に生かしていくことできていない
- ・保育の自己評価をドキュメンテーションなどを通してすすめる方法や保育の展開の仕方を理解しきれていない

◎取組みの内容◎

【1回目訪問】「保育所における自己評価ガイドライン」（2020年厚生労働省）を参考にして作成をした。初めての取組みであったので、Ⅰ期のねらいを通して、各クラスが取り組んでいるクラス便りを使用した日常の保育の写真やコメントなどを組み合わせてまずは作成してみることを目標とした。

（講師より以下のように、助言を頂く）

- 子どもたちが日常の再現をしている姿を発見しているか、次に保育の中でどう生かしていこうかなど考えているか。生活と遊びを近づけていく要素を取り入れていく。そのために担任間の共有が重要。また、保育士自らが楽しむ姿勢を大切にする。
- 制作活動、とくに描画について子どもは自由に描画することを踏まえ、表現範囲、いろいろな素材、選択の自由等、幼児クラスが連携して広げていく。
- 相撲の取組み、保育士も相撲が好きという気持ちが大事。保育士の「共同作業・モデル・見守り」の状況に応じた役割が重要。それらを踏まえて年長児の姿を公開して見せていく。
- クラス便りを通して子どもの変化に気づく、変化とはなにかを学んだ時に保育の展開が起こる。自分がどれだけ気づくかという視点で写真を撮っていく。

【2回目訪問】2回目の振り返りを踏まえ保育実践の中からⅡ期のドキュメンテーションの作成を行う。Ⅱ期のドキュメンテーションについては、園目標の3項目を各クラスの共通の視点とした。

→クラス便りによって自分自身の保育の振り返りができている。子どもたちの日常の再現について、以前より前向きに関われるようになった。写真に写っていない子どもの姿を予測する機会になっている。理想通りにはいかないが、振り返りが継続できている。

- 日常で子どもたちがやっていることを広げてあげられるとよい、自然とゆとりをもてることが課題。
- 描画について子どもの反応が様々な姿に難しさを感じるとあったが、子どもの経験によるものだと思う。学ぶ機会、探求心を広げる、考える習慣をつけさせてあげるとよい。

【3回目訪問】Ⅲ期のドキュメンテーションはこれまでの振り返りをそれぞれに取り入れ、前期同様園目標の3項目を意識しながらのクラス便り作成を行い、ドキュメンテーションへ展開する。

- 保育士の子どもたちの興味の引き出し方がうまくいかないと感じる。引き出し方を教えてもらいたい。言葉にならない部分を含めて子どもの姿をとらえることを意識し、子どもの気持ちを引き出す際には本当に引き出せているか、悩んでいる。
- 年長のモデルは担任、という助言を受けて、「恥ずかしさを捨てられない気持ち」があったが、今回のダジャレかるた大会で子どもと一緒に楽しみ、本気で取り組んだ。子どもたちも盛り上がり、このような担任の姿が子どもたちに伝わることを実感した。また、その影響から興味を持ていなかった子が興味を持ち始める姿もあった。
- ごっこ遊びの世界は広がっている、反応速度を早め、子どもが表現したいものを意識して保育室に用意できているか。子どもが表現することを気づくためには、難しいことではあるが、保育士に余裕が必要である。
- 保護者は周りの子と一緒に遊びや活動に参加しているか、という視点で捉えているが、見ているという行為もその子にとっては、やっていると同じように大事であるということを伝えてほしい。
- 子どもの葛藤と試行錯誤の入り口を保育士が余裕をもって受け止めていけるかが大事ではと考える。
- 『ダジャレかるた』はこれまでのプロセスを保護者にも知らせていけるといいと考える。

◎振り返りと今後に向けて◎

3回のコーディネーターとの振り返りから、自己評価を重ねることで、保育における子どもや環境への視点の向け方、保育実践の工夫など、取り組むごとに課題は見つかるものの、そこからさらに自身の保育、組織としての保育を見つめ改めていくことを学んだ。3回目の話し合いの中で保育士から「意識する」という言葉が多く聞かれたことから実感させられる事であった。今後ドキュメンテーションを保護者に公表をし、外部の視点を学び、組織としての保育の質の向上につなげていきたいと考えている。

◎年度当初の状況と課題◎

- ・小規模保育事業ならではのアットホームな雰囲気のもと、全職員が連携し、保護者まで含めみんなてみんなを育てている、という意識であたたかな保育を行うことができています。
- ・自己評価の取組みを通して、保育者の専門性にもとづいた環境構成や関わりのスキルを向上させ保護者に向けて可視化・発信していきたい。

◎取組みの内容◎

I 期（４月～６月）園の取組み

「対話と包摂」というテーマを持って、子どもの姿ベースで環境構成をする係分担

コーディネーター訪問時の助言：より子ども一人ひとりの世界に寄り添うような振り返りができると、小規模保育事業ならではの実践ができるのではないかな？

園の取組み：期の振り返りで、個の育ちに着目したフォトカンファレンスの実施

II 期（７月～９月）園の取組み

I 期の取組みに加え、日々の語り合い（昼礼）を中心とした週ごと・月ごとの振り返り
→子どもの姿をベースにした保育の展開に

コーディネーター訪問時の助言：行っている振り返りや記録を、もっと自己評価に活用を
→ 記録に「#」をつけて視点を明確に、かつ、見返したときに振り返りやすくしては？(※)

園の取組み：年度前半の振り返りをふまえ大切にしたいことを園の方針に基づいた６つの「#」として設定

(※)当園では連絡帳を ICT ソフトを使用して作成、データをダウンロードして「#」で検索するなどできる

III 期（１０月～１２月）園の取組み

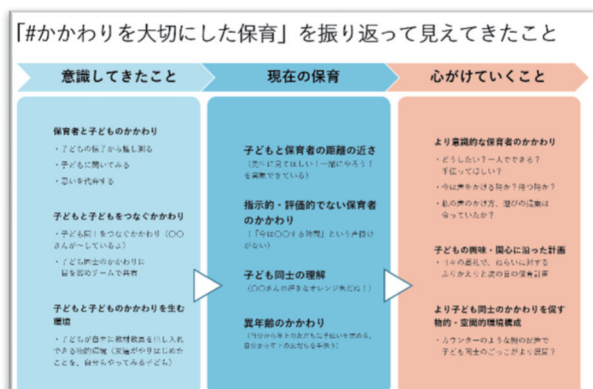
- ・日々、連絡帳を書く際にその内容に即した「#」をつけていった。
- ・第三者評価の受審を通して「子どもの主体性を引き出すかわり」を課題として明確化

園の取組み：期の振り返りで「#かわり」を大切にしたい保育」につながる保育内容を中心に議論。園の強みと今後さらに取り組んでいくことを決めた。

コーディネーター訪問時の助言：データのさらなる活用、養成校連携の可能性など

◎振り返りと今後に向けて◎

エビデンスに基づいた自己評価：感覚によりがちな中期的な振り返りが、日々の記録を基にした根拠あるものとなった。**既存記録の活用で時短と質向上を両立：**自らの保育を正確に捉え、質を上げていくための振り返りとなった。通常業務との連動により、自己評価のために改めて時間を捻出することなく取り組めた。今後もルーティンとして取り入れ、更なる質向上を図る。



◎年度当初の状況と課題◎

制作活動やその準備が忙しい現状から「表現遊び」とは何だろうという疑問が沸き、各自が思っていることをざっくばらんに話してみると、様々な考えや違いがあることがわかった。また、保育者自身も自分らしく「表現」できているのかという課題があることに気づいた。子どもの姿から見る表現と、保育者自身の表現について考えていくこととした。

◎取組みの内容◎

1. 子どもたちの表現

☆「できた、できない」「上手、下手」ではない「表現する喜び」を感じることが大事！

絵の具遊びがあまり好きではない子どもが「上手じゃないんだもん」と言ったことや、保護者から「飾ってかわいい作品を作してほしい」と言われたことがあった。表現遊びは上手、下手という評価ではなく「たのしい！おもしろい！」という感性を大切にしたいと考え、飾るだけでなく、実際に子どもたちが普段遊んでいる段ボールの秘密基地や一人ひとり違う作品を飾ったり、今まで遊んできた積み木の写真を飾ったりした。子どもたちが保護者に自分や友だちの作品を語ったり遊んで見せたりする姿がとても生き生きしていた。



年長児の秘密基地

「私たちが作った秘密基地、大人気だね」「でも、みんなが入って遊ぶとこわれちゃうよ」…子どもたちの葛藤。

表現する喜びを感じている

「窓に絵の具つけたら、手の形になったよ?!」「手がべったべた!きもちいい!」様々な感触や色合いを楽しむ子ども達。



2. 保育者の表現

☆先輩も後輩も、「思わずやりたくなる!」「つい巻き込まれる!」横並びで、楽しさ、嬉しさの共有!

「楽しさを共有する」ためにまず自分が「やりたいことをやってみる!」ことに。周りに合わせてやらなくては…と思えず、I (アイ 私) メッセージがあってよいと気づく。誰かの楽しいに、**思わず心が動き一緒にやってみたくなる**、そんな保育や同僚性が育まれることが大切であると感じた。また、カリキュラム反省は写真、付箋を使い自分の思っていることを伝え、それに対し「合っている、間違っている」などの評価ではなく、たくさん話すことを重視した。

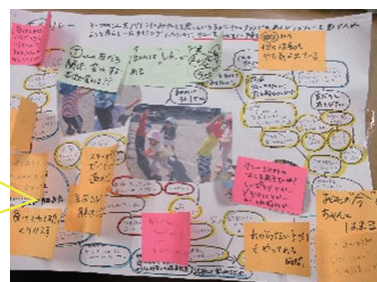


もっと自分の保育を話そうよ

「ヒロインごっここの時はキュア〇〇になっています!」(若者会)

私はこう思う!

一人ひとりの意見をもっと自由に。
Webで語り、計画の振り返りに。



◎振り返りと今後に向けて◎

「表現とは」から始まった、子どもの活動に対する考え方や保育者が自己表現することができていたのかという気づきから2つの実践を行ってきた。先輩も後輩も「話したい!」という気持ちがあり、それこそが保育の質を高めることであるという気づきがあった。報告だけが多くなっている現状で、「自分が感じておもしろかったこと」を伝え合うことが子どもも保育者間も重要なことで、話すことの価値を再確認した。保育者自身が、保育に対して主体となり、自身のキャラクターを際立たせ、生き生きと保育することの大切さを改めて感じることで、保育者も子どもたちも自分の思いや考えを生き生きと、わくわくしながら語れる保育園にしていきたいと考える。

教育理念の理解と実践

～「こんな子どもに育ってほしい」：強みを生かし、願いを持った教育活動～

コーディネーター：東京成徳大学 坪井 瞳氏

◎年度当初の状況と課題◎

- ①保育にやりがいを感じ、学び続ける教諭集団作り
- ②教育の質の向上のために欠かせない教諭自身の資質向上
- ③チームが一つとなり、語り合い、理解し、学び合いの場を作る

◎取組みの内容◎

* 1 回目（6 月 1 2 日） 「私たちの園の方針と歩み」

本園の教育理念である「愛育」、八十年に渡る園の歴史、七十有余年にわたる完全給食の実施など、一人ひとりの個性を大切にしながら多様な経験と情操を育む教育環境、未来を担う子ども達の健全な育ちに貢献している園の歩みと思いを園長より説明。2 回目以降では、こうした園環境の中で、日々保育を実践している一人ひとりの教諭の実践に対する思いを言語化し、教諭間でシェアをしていくことにした。

* 2 回目（9 月 2 2 日） 「私たちの強みとは？」

園の強みを探りながら、チームの力を高め、保育の質の向上を目指す方法を考える機会となった。

2 グループに分け、教諭一人ひとりが今の思いを語った。現在、頑張っていること・難しさを感じること…思いを語り、聴く中で、子ども達の声や姿の話に皆で笑いあったり、一緒に涙をしたり。次第に、「そんな先生に普段から助けられています！」

「先生の〇〇の姿勢に学ばせてもらっています」など、互いの良さに気づき、認め合い、肯定的で温かい言葉を送り合う時間となった。そして最後に、「教育理念を踏まえつつ、いま向かい合っている園の・クラスの子どもの姿から、教諭自身が自分の言葉で『こんな子どもに育ってほしい。こんな力を育てたい』という願いを言語化してみよう」という第3回目に向けての「宿題」が出された。



* 3 回目（1 2 月 1 5 日）

「私たちの、私たちによる、子どもへの願いー『子どもらしい子ども』として育つ」

コーディネーターを交えて意見交換したことで、互いの保育観や思い、良さや強みを伝え合うことができ、客観的に自分を知ることでもできた。そして、こうしたリスベクトがチームワークの深まりに繋がっていると感じた。

第3回目の前には、職員間で1年の保育を振り返るワークショップも自主的に実施した。

当日は、「こんな子どもに育ってほしい。こんな力を育てたい」という願いを互いに語った。卒園までに小さな積み重ねを大事に、そして幼児期の経験が力となっている将来の子どもの姿を見通す。そのためには、「子どもらしい子ども」であることを大切にしたい、という等身大の願いが見いだされた。教諭一人ひとりが言語化することで見いだすことのできた願いである。



◎振り返りと今後に向けて◎

「子どもらしい子ども」として育つ。そのためには、以下のことを日々の保育の中で大切にしていけることを確認した。「①自分の思い・考えを表現すること：自分の生活を作り出すことに繋がるように ②選ぶこと：日々主体的に生活に関われるように ③挨拶をすること：人に愛され、人との関わりの基盤として ④相手の思いに気付ける：受け入れられる経験を積む ⑤自分で考える・理解する：小学校への生活に向けて（年長を中心に） ⑥小さな幸せに気づける：さまざまな困難を生き抜く中で、自分を自分で肯定できる力として」。我が園の強みは、チームとして安心してチャレンジでき、同僚性が大切にされる職員集団であることである。子どもの思いや声・姿、教諭同士・保護者同士、園が持つ資源を十分に生かしながら、「愛育」の理念が子どもたちへの未来へと繋がるよう、日々の実践を積み重ねていきたい。

◎年度当初の状況と課題◎

子どもたちが明るく健やかに生活できる、保護者の方に安心して預けていただけることを目指し子どもと向き合っているが、怪我のないように見守る姿が多くなってしまった。

また、保育者間で話し合うようにしているが、もっと有意義に話を進めたり、子ども理解を深め、保育者が主体性を発揮できるような環境を作っていきたい。

自信をもって楽しく子どもと向き合える時間を多く作りたい。

◎取組みの内容◎

子どもを見る力を育てる！でも「見る！」というと「見守る」「監視する」になってしまいがち。「こういう姿見られたよ」「こういうこと言ってたよ」という共有をクラスで多くすることで、声掛けの仕方や遊びの提供、保育者の働きかけを話すこともできる。

話すことで、子どもへの対応で悩んでいたり、経験年数の少ない保育者もクラスでの子どもへの働きかけが明確になり自信につながる。また、より子どもの姿を観察し関わりや働き掛けも充実する。

☆上記のことを目的として各クラスで「この場面どう声掛けしますか？」「この姿どう思いますか？」という写真を持参し、クラスごとに写真を見て話し合い、発表をした。



(0歳児クラスの子が机に登っている写真)

－0～2歳児クラスの保育者の感想－

- ・登りたかった気持ちを受け止める。登れるようになったことを認め、違う登れる環境を作っていく。登れるようになり成長を感じるなど。

－0歳児クラス未経験の保育者の感想－

- ・危ない。登りはじめに止めるべきか登りきってから止めるべきか。

どの保育者も子どものことを考えて配慮や声掛けを行なっているが、他の保育者の感想や考え方を聞くことで「そういう考え方もあるのか」と柔軟になり、話し合うことで方向性も定めることができた。

振り返りの目的で、クラスで改善したい場面などを動画で撮影し、後日担任と他のクラスの保育者数名で見る機会を作った。ルールとしては保育者個人の動きではなくクラス全体の話と、指摘ではなく質問やアドバイスをしていくことを決めた。

- ・自分たちの経験を話し、今のクラスの改善の手立てとなった。
- ・悩みを共感してもらえた。 ・いいところを見つけてもらえた。
- ・他のクラスの過ごし方が少し見られていい学びとなった。
- ・自分の保育や声掛けの振り返りになった。

◎振り返りと今後に向けて◎

何をするにも無理なく続けていくことが大切とコーディネーターの先生からアドバイスをいただいた。写真や動画を振り返りに使うことで、話も広がりやすく話の主軸が逸れずに有意義な話し合いを進めていけることが感じられたので、今後も無理のない形を考えながらすすめていきたい。

会議や話し合いだと固い話になってしまうことも多い。まずは楽しい雰囲気の中かで様々な保育者の話を聞き、自分の考えも伝えることで子ども理解を深め、一人で頑張りすぎないように！を大切にしていければと思う。

「やりたい」を実現する環境づくり

コーディネーター：東京家政大学 堀 科氏

◎年度当初の状況と課題◎

前年度より「環境」についてテーマを絞り、意見交換や保育を語る機会を持つことで、お互いの保育が分かり、よりよい連携につながってきた。しかし、保育のプロセスを意識して継続的な保育を進めることや主体性を大切にする保育を共有する難しさもあった。

◎取組みの内容◎

各自コンパスを読み、園のテーマとして「環境」について保育のプロセスや主体性を大切に始めていくこととした。

- ① 主体性とは？の共有 子どもの主体的な姿を話し合い、自分達の考える主体性の尊重を「やりたいを実現しよう」をテーマに、主に『環境』に絞って取組みを進めることとした。
- ② 毎月のカリキュラム反省で自園の振り返りシートを用いて、写真や日誌に記録した子どもの姿から、遊びの環境づくりをどう進めたか、どのような姿があったか、次回どうするかとしたプロセス（PDCA）を検討するとともに、付箋を用いてグループでの語り合いを重ねた。9月以降、様式も自由形式に変えたことで、各クラス自由度が上がり子どもの様子が他クラスに伝わりやすくなった。語り合いの中で「いいね」と互いの保育を認め合うことから、後半は「なぜ？」「どうして？」と視点を変えて話し合いを進めてきたことで、その遊びの過程や背景、子どもの姿の理解や担任の考えの理解につながり、互いの共有・共感できる時間となった。

<新しいカリキュラム反省の様式例>



<付箋を使って意見交換>



◎振り返りと今後に向けて◎

主体性とは？ということを保育士自身が意識し、子どもの姿から、あるいは子ども達と相談しながら、子ども自身で考え、選べる環境づくりを意識して保育を進めることができた。3～5歳児クラスは積み木をとっておくための室内環境、自由に使える造形ワゴンの設定などを進め、1・2歳児クラスは棚などで仕切り、コーナーをすることで、自分で遊びを選びじっくり楽しめる環境を作ってきた。毎月、保育を語り合うことで、子どもの姿を共有・共感することが多くなり、更に保育士の連携が増え、お互いの学びにもなっていった。それが子ども達にも良い影響を与え、様々な遊びが広がり継続につながっていった。今回の取組みを通して、保育士 **<幼児みんなで積み木の日>** 自身の主体性も大切であるという声が保育士から出てきている。

今後も今年度の学びを活かし、保育士の主体性も意識し子ども達との対話を大切にしながら、保育を進めていきたい。



～1・2歳児クラスのお友達もどうぞ～

保育エピソードを通して自己評価を行う

コーディネーター：東京家政大学 堀 科氏

◎年度当初の状況と課題◎

本園では、日々保育の話を保育者同士で行う習慣がある。毎日書いているドキュメンテーションやエピソード記録を使って保育の面白さに気づき、次の計画に繋がるようにしている。また、保育プロジェクトの実践をドキュメンテーションに記録し、その後、職員会議（園内研修）でプレゼンテーションを行っている。発表者から課題だと思った場面や評価した場面を問いにし、少人数でのグループワークを通し、保育者同士で学びを深めている。一方、乳児及び低年齢児の保育を自己評価することの難しさを感じており、一人ひとりの発達、興味や関心に寄り添いながら、評価を行うためにはどのようにしたらよいかを考えていきたい。

◎取組みの内容◎

ねらい：実践と理論を結び付け、より専門性を深め、人に伝えられるようになる。

乳児および低年齢児の成長を可視化し、それぞれの保育者の保育観を共有する。

方 法：乳児会議の中で、毎回1事例ずつ輪番でエピソード（心が動いたこと・なぜだろうと思ったこと・おもしろいと感じたこと）を出し（写真や動画を使ってもよい）、それに対して他の保育者と語り合う。（エピソード会議や討論会といった名前）

保育者の思いが語られる場であり、その保育者の見立てをもとに語り合う。（付箋を使って、文字化していく）他者の考えを知ることが良い機会になり、学びが深まっていく。実践コンパスを指標のような形で使っていく。

1. 子どものエピソードを持ち寄って定期的に会議を行う。

（内容）保育者同士で各々がもちよった子どもの姿を元に子どもの興味や関心、発達の過程、関係性を考えていく。

2. 週に1回のクラス会議内でエピソード会議を行う。

（内容）発題者は事前にエピソードを記入し問い出しをする。出席者は問いに対する意見を付箋に記入し持ち寄り会議を行う。

3. 話し合いだけで終わらずに、その後の保育の改善に繋げていく。

（内容）エピソードを通して、保育の環境や保育者の関わりなどどのようなところが改善できるのか、どのように改善していったらよいのかを捉え、その後の保育に繋がるよう検討する。

4. 子どもの発達に様々な視点から捉えられる様に、コンパスの項目を参考にしながらエピソードの話し合いを進めていく。



◎振り返りと今後に向けて◎

【振り返り】

保育者の意見交換は活発に行われていたが、具体的に子どもの評価や保育の評価に繋がっていなかった。個別のエピソードを深掘りすることで発達の評価や子ども理解に繋がっていくと感じた。

【今後に向けて】

- ・書き手の主観で捉えたエピソードの記述で終わることなく、話し合いの中で多様な考察を行いエピソード前後の文脈も話し合っていきたい。
- ・子どもの育ちや、子どもは何が伸びているのか、保育者は予測できているのか、子どもの姿をどのように見とるのかなどは日常的な話し合いだけでなく、改めて会議として取り上げることで、自分達の保育の評価を深めていきたい。

組織で実現する子ども主体の保育

コーディネーター：洗足こども短期大学 井上 眞理子氏

◎年度当初の状況と課題◎

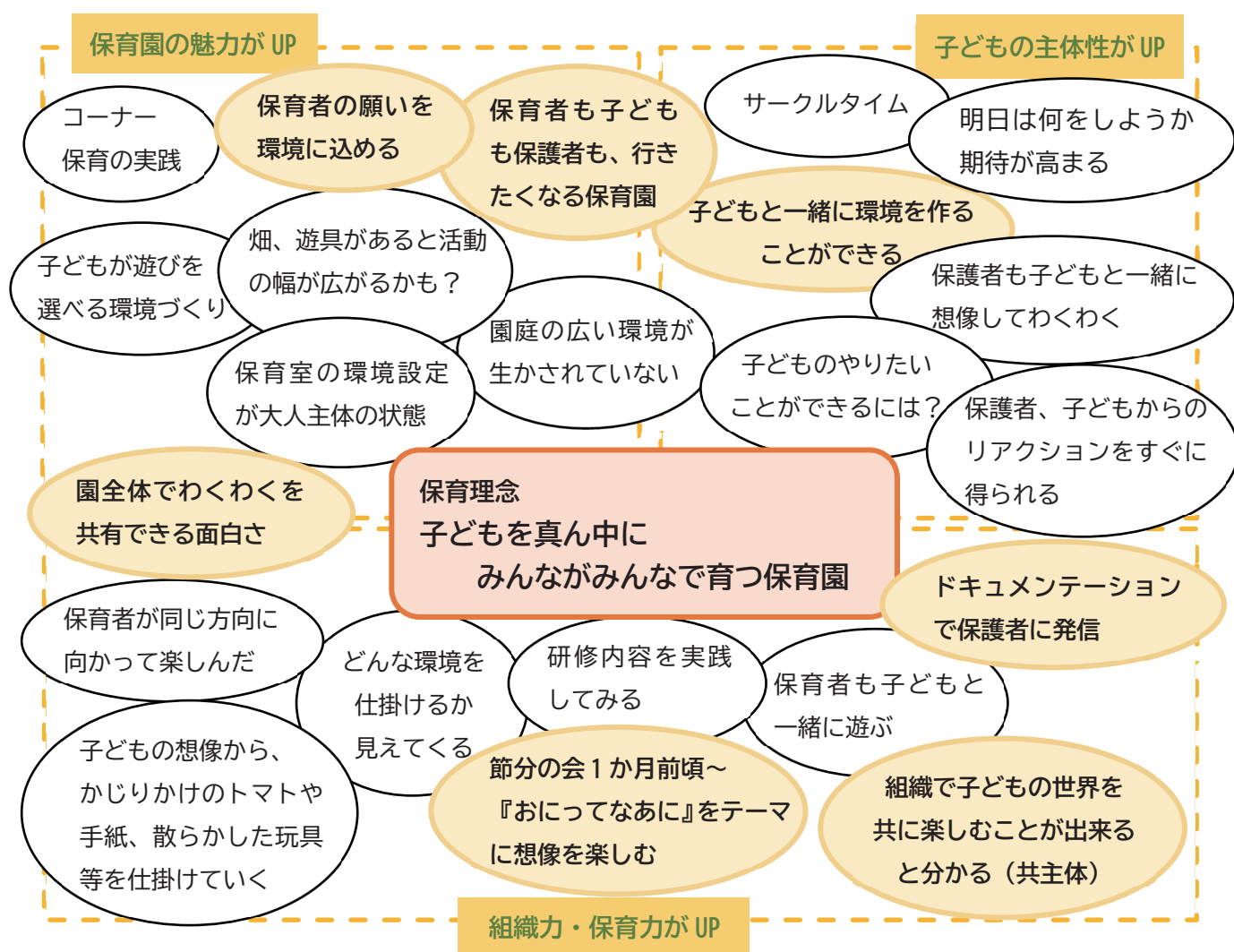
「園の強み」 ハード面：立地、自然素材・和にこだわった園舎、園庭の広さ

ソフト面：保育経験豊富な保育者が多い

「課題」 開園3年目、園長、主任の交代を行い、心機一転、様々なことを見直したり、確認したりと取り組んでいる。保育における環境（人的・物的）を見直す上で、遊びの動線を鑑み室内や園庭の整備をしていきたいと考えている。

◎取組みの内容◎

全4回のコーディネーターとの話し合いや研修を通して、子ども主体の保育の実現を目指す。



◎振り返りと今後に向けて◎

「1回目」園の課題を再確認し、職員との面談を行って保育に繋げていった。「2回目」保育の内容や環境について職員と講師の方で話し合いを設けた。保育の内容を話し合っていく中で、組織として仕事を行うことに対しても課題が見えた。「3回目」組織について全職員で研修を行った。この事業の中で、保育と組織の両面を園全体で考える機会となり、保育の内容や意識が変わった面も見られた。今回の事業を基本に、子ども主体の保育を園全体で再認識し、子どもも保育者も楽しむ保育を目指していきたい。

社会福祉法人ナオミの会 ナオミ保育園分園ぶどうの木 環境を見つめ直す

コーディネーター：大妻女子大学 坂田 哲人氏

◎年度当初の状況と課題◎

日常の保育課題をどう乗り越えるのか、保育を見直し前に進むために、何が必要かを職員で日々の保育で気になっている「環境」をテーマに保育を考えて行く。現状の環境を子ども達の遊びから考えてみたい。

◎取組みの内容◎

幼児クラス的环境を見直し片付け中心ではなく遊び中心の空間に



幼児クラスは、異年齢保育です（3歳4歳5歳）。異年齢で遊ぶまたは同年齢の遊びの保障など配慮事項は盛りだくさん。同年齢の活動はその年齢の理解に配慮する。絵本の内容を対象年齢に合わせる。継続して遊びを楽しむ機会、構成遊び等「つづきはあした」と、日をまたぐ活動を楽しんでいる。

2歳児遊びと体験



年間通して遊んだ「桃太郎」「三びきのこぶた」遊びグッズがどんどん増え、その後、表現活動に発展、1年間楽しめた。



「ブロッコリーの房分け」興味津々で見学沢山の食物・魚に触れてきました。毎日の給食が楽しみ。散歩帰園後の第一声は「今日のご飯なあに」です。ままごとの充実へ発展にもつながっている。

◎振り返りと今後に向けて◎

【環境から保育を考える】

環境の見直し保育の振り返りなど、改善に向けた取組みを行い絵本の提供、室内環境などを考える機会を頂いた。

子どもたちの遊びから発展する環境の構成は、遊びをより持続性のある遊びへと発展することが出来たので、この体験を次につなげていきたい。また、各年齢の遊びを充実させることは、子どもの姿を捉えていないと実践につながらないこともわかったので、今後につなげていきたい。坂田先生からの「あまり頑張りすぎないように」というお言葉は、日々頑張っている職員への励ましとなった。

効果的な保育の振り返りと自己評価について考える

コーディネーター：玉川大学 田澤 里喜氏

◎年度当初の状況と課題◎

今年度は、職員の入れ替わりが多く、若手職員も増えたため、より子どもについて、保育についての話し合いをしっかりとしていきたいが、打合せの時間が十分に取れないことが課題。保育についての振り返りは、日・週・月・期毎に個人・クラス・全体で行っているが、自己評価への理解は人により様々だったり明確になっていなかったりする部分もあり、今後も学びの機会を持ち共通理解していきたいところである。園の特徴であるアスレチックや運動遊びに力を入れていこうと話している。チーム力を高め積極的に取り組めるようにするための方法や効率よく効果的な話し合いの方法について話し合いながら、職員一人ひとりが力を発揮し前向きに取り組めるようにしていく。

◎取組みの内容◎

- ①「アスレチックを含めた運動遊びを深めていく」
- ②「仕事の効率化を図り、保育の振り返りの時間を増やすとともに、職員も心身ともに健康に過ごす」

当初は、上記2点について目標としていたが、アドバイスをいただきながら話をしていくうちに、自分たちの取組みをどう保護者に返していくのか「自己評価」についての目標も新たに見えてきたことで、自分たちの目標が明確になった。

運動遊びは「幼児期運動指針ガイドライン」（文部科学省）を参考に『36の動き』を、各クラスでアスレチックを含む運動遊びの中で、どの程度実践できているか照らし合わせ可視化することで、足りない動きが見えてきた。またミドル研修に絡めて行うこととした。自己評価については、より絞り込み、今までやってきた振り返りの形を変えることで、効果的で効率のよい内容を目指す。早速、仕事の効率化も踏まえ、これまで園だよりの裏面に記載していた各クラスの毎月の振り返りをある程度ひな型を統一した書式にして写真付きのもので作成、クラス前に掲示する方式を9月より実施している。

月案と同様の文言でねらいを入れ、ねらいについての補足は保護者にむけた言葉にする

文章だけでは伝わりにくい

写真が入ることで、文章の補足ができる

◎振り返りと今後に向けて◎

毎月の振り返りに関して、現在はその流れに慣れていく時期であり、今年度はここまでやった、次年度はこうしていくと段階を経ていくものになると継続して取り組み、いいサイクルになっていくということを学んだ。今年度は、まず振り返りの仕方を変更し、やり方に慣れてきた。完結せず発展させていくことの大切さや、取り組みを続けることで新たな気づきや問題等、見えてくるものがあつた。次年度は、クラスで作成した振り返りを職員同士でより気軽に話す機会や保護者にも意見がもらえるように掲示のそばに付箋とペンを置いておき、肯定的な意見を気軽に記入してもらえるよう工夫する等、次のステップに進んでいく。運動遊びについては、心と身体の健康を育てていくものなので、意欲や遊びの気持ちよさを一緒に育てていけるようにしていきたい。

職員が共通意識をもって保育の質を高めるには

コーディネーター：昭和女子大学 遠藤 純子氏

◎年度当初の状況と課題◎

法人が作成した自己評価チェック表と考課表を令和4年11月より使用している。

保育の質を高めていくにあたり、職員全体で共通認識をもって取り組んでいくことを模索している。

◎取組みの内容◎

1回目は職員間のコミュニケーションの活性化と保育について話し合うことを目的として行った。普段、職員間で思っていることを口に出して伝える機会や関係性が築けていなかったこともあり、クラス単位で思いを共感する機会となり、お互いの思いに改めて気付くことや、話し合うことの大切さを認識することにつながった。

2回目は、「保育の質とは？」というテーマで、他園での保育の様子を動画で視聴し気付いたことを話し合い、同時に遠藤先生から援助や環境配慮についてのポイントを教えていただいた。

職員からは、「(この園では) 職員の声が目立つことなく、子どもの動きをよく見て、さりげない援助をしている。」と驚きの声が上がるとともに、「子どもも職員も落ち着いている。私たちと何が違うのだろう…」と自らの保育を振り返る姿がみられた。「職員は役割を明確にし、慌ただしく動かないように意識する。」「ゆったり過ごしたいスペースにパズルマットを敷く。」など、すぐに実行できる内容を考え、提案することができた。

◎振り返りと今後に向けて◎

コーディネーターとの語り合いの場を通して、より具体的に保育者の援助や環境設定について話を深めることができた。今後は、リーダー層を中心に、日々の保育者のかかわりや環境について、職員間で話し合いながら風通しのよい保育を行っていけるようにする。

また、10月の園だよりにてコーディネーター派遣事業での取組みを公表した。引き続き保育の質を高めるために、職員一人ひとりが考え、共有し、実行に繋げていきたい。

【9月6日（2回目） 保育の様子 DVD を視聴後、職員同士で話し合う様子】



子どもの気持ちに寄り添う保育を目指して

コーディネーター：洗足こども短期大学 井上 眞理子氏

◎年度当初の状況と課題◎

ドキュメンテーション、環境の見直しの取組みを通して、職員が子どもの姿にしっかり目を向けようとする姿勢がある。その中で、保育士の都合ではなく、本当に子どもの気持ちに寄り添っているのか、子どもの気持ちや思いを聞き取ることができるのか等、疑問に感じる瞬間もあり、丁寧な振り返りが必要ではないかと考えた。課題に対する目標を明確にしなければいけないと考え悩んでいたが、井上先生のアドバイスを受け、形に囚われるのではなく、職員が自主的に考えることが、結果的に子どもにとってより良い取組みにつながるような方法を考えていくこととした。

◎取組みの内容◎

1、俯瞰図を活用した環境の見直し

俯瞰図を書くことで自分のクラスの環境を客観的に見ることができるため、今年度は全クラスが取り組む。子どもが何に興味を持っているのか、どんな環境を準備したら良いのか、保育の振り返りにつなげることができる。また、担任間で、環境のねらいや意図を共有する機会にもなった。

2、ドキュメンテーション

個や集団の子どもの様子をしっかりと見ようとし、自分達の保育を振り返る機会となるため、今年度は全クラスが取り組む。クラス毎に目的、対象、方法を考え取り組むことで、保護者との語らい、親子の会話のきっかけづくりのツールとして活用し、内容の充実を図ることにつながった。

3、園内研修

子どもの気持ちに寄り添えた場面、寄り添えなかった場面を持ち寄り、「子どもの気持ちに寄り添う」とはどういうことか、3グループに分かれて話し合いを行う。なぜ子どもがそのようにしているか考えること、その時々にはふさわしい支え方、見守り方を考えることが、子ども理解につながっていくのではないかと確認した。

4、若手会

「何でも伝え合える職場の雰囲気づくり」という課題に対して、特に若手職員が主体的に考え、発信できる場づくりが必要であると考えた。10年目の職員が中心となり、月1回、保育実践に活かせるようなものや仕事をする上での困り事などを話し合っている。

5、月間指導計画反省

毎月、クラスの中で話し合いたい内容について、職員が考えた方法（動画を撮影したものを見ながらの検討、ミニアセスメントシートを活用した検討、公開保育を通じた検討）で行っている。気になっている子どもの姿を実際に見合うことで、具体的な様子が伝わり、様々な視点に触れることでの気づきがある。

◎振り返りと今後に向けて◎

今回、様々な取組みを実践するにあたり、クラスやグループ等の中で職員自らが考案し、実践していくことを大切にしてきた。その中で、上手いかないことや行き詰まることもあり、試行錯誤を重ね、現在に至る。「子どもにとってどうなのか」という視点を大切にしながら、悩みつつも考えやってみたことが、結果的に子どもの気持ちに寄り添うことにつながっていったという点で、井上先生からいただいたアドバイスを元に取り組めたことは、大変有意義であったと考える。来年度以降も、職員が自主的に考え取り組むことを大切にしながら、「子ども中心の保育」をぶれずに考え、実践していけるようにしていきたい。

IV. 令和5年度 乳幼児教育支援センター事業実績

1. 乳幼児期の教育・保育の充実と発展

(1) 教諭・保育士等の人材育成

○研修 全27回 申込者数2,039名(34ページ参照)

○実践充実コーディネーター派遣事業(16ページ参照)

実践充実コーディネーター派遣実績

区立幼稚園1園 私立幼稚園1園 区立保育園8園 私立保育園7園(小規模保育事業含)

○モデル研究(2ページ参照) 令和4~5年度継続研究

『学び舎を起点とした幼保小中の連携の充実』4学び舎

『園の教育・保育の評価(自己評価を中心として)』3園

(2) 就学前の教育・保育と小学校以降の教育との円滑な接続

○学び舎を中心とした幼保小中の連携推進

・学び舎参加状況 区立幼稚園8園 私立幼稚園7園 区立保育園45園

私立保育施設115園

計 175園

○アプローチ・スタートカリキュラムの推進

・乳幼児教育アドバイザー 訪問実績 区立幼稚園1園 区立保育園3園

2. 乳幼児期の資質・能力を育む環境づくり

(1) 文化芸術体験(音楽・粘土・どこでも文学館)

(2) 「言葉の力」育成プログラム(「話す力」「プレゼンテーション能力」等の基礎の育成)

3. 家庭教育の支援(家庭教育、子育て支援のための講座・ワークショップ等)

○すくすくコンパス(全6回実施)

子育て世帯に必要な、基本的なライフスキルを身に付けるためのヒントや、保護者の方の子育てに関する不安を和らげる手助けとなるよう各種講座を開催しています。

〈テーマ〉

『子どもの権利』『子どもの発達』『小児医療のかかり方』『メディアとの付き合い方』

『おうち性教育』『お父さんの子育てへの関わり』

○すくすく広場(全8回実施)

豊かな親子関係づくりと子どもたちの健やかな成長に向けて、非認知能力等乳幼児の資質・能力を伸ばすためのワークショップ等、様々な取組みを実施しています。

〈内容〉

『読み聞かせと交流会』『こころ・からだ・性のことを親子で学んでみよう!』

『積み木探検隊』『保幼・小接続支援ワークショップ』

○すまいるたいむ

保護者の方々と地域子育て支援コーディネーターが、教育総合センター内の広場で、子育てのことなどについて一緒に話したり考えたりします。

【令和5年度 乳幼児教育支援センター研修実績】総申込者数 2,039名

研修名	対象	講師名	申込者数	
初任者	初任者研修（幼保小中合同）	新規採用 教職員	佐々木 掌子（明治大学）	90
管理職	管理職研修	管理職層の 職員	河合 優子（聖徳大学）	147
人権	子どもの権利研修	全職員	西 智子（元日本女子大学）	205
保育実践	乳児保育研修	概ね3年 以上の職員	堀 科（東京家政大学）	114
	幼児教育研修	概ね3年 以上の職員	田代 幸代（共立女子大学）	94
	特別支援教育研修	概ね3年 以上の職員	若月 芳浩（玉川大学）	94
	コンパス・ワークショップⅠ ～保育を語り合おう～	概ね3年 以上の職員	岩田 恵子（玉川大学）	104
	コンパス・ワークショップⅡ ～保育を語り合おう～	リーダー層 以上の職員	田澤 里喜（玉川大学）	93
	保育の基本研修 （発達と子ども理解）	全職員	無藤 隆（白梅学園大学） 古賀 松香（京都教育大学） 荒牧 美佐子（目白大学）	106
	園評価研修	リーダー層 以上の職員	石井 章仁（大妻女子大学） 遠藤 純子（昭和女子大学）	91
	保育充実研修① 「環境構成と援助」	全職員	田甫 綾野（玉川大学）	117
	保育充実研修②「子ども理解 と伝える力・記録について」	全職員	松山 洋平（和泉短期大学）	103
子育て 支援	保護者支援研修	全職員	園田 巖（東京都市大学）	111
	地域の子育て支援研修	リーダー層 以上の職員	倉石 哲也（武庫川女子大学）	128
連携接続	幼保小接続推進研修 ～幼児の発達と学びをつなぐ要録～	全職員	福井 直美 （全国幼児教育研究協会）	106
組織性	マネジメント研修	リーダー層 以上の職員	坂田 哲人（大妻女子大学）	82
	人材育成研修	実習担当 職員	井上 真理子 （洗足こども短期大学）	84
危機管理・ 安全対策	リスクマネジメント研修 （基礎）	リーダー層 以上の職員	関川 芳孝（大阪公立大学）	98
	リスクマネジメント研修 （発展）	基礎編を受 講済の施設	関川 芳孝（大阪公立大学）	72

【令和5年度 講師一覧】（敬称略）

《モデル研究講師》

『学び舎を起点とした幼保小中連携の充実』

箕輪 潤子 （武蔵野大学）

『園の教育・保育の評価（自己評価を中心として）』

石井 章仁 （大妻女子大学）

大村 あかね （浦和大学）

遠藤 純子 （昭和女子大学）

鈴木 祥子 （昭和女子大学）

田澤 里喜 （玉川大学）

上田 よう子 （玉川大学）

《実践充実コーディネーター》

〈コーディネーター〉

荒牧 美佐子 （目白大学）

石井 章仁 （大妻女子大学）

井上 真理子 （洗足こども短期大学）

遠藤 純子 （昭和女子大学）

坂田 哲人 （大妻女子大）

田澤 里喜 （玉川大学）

坪井 瞳 （東京成徳大学）

堀 科 （東京家政大学）

松山 洋平 （和泉短期大学）

〈スーパーバイザー〉

無藤 隆 （白梅学園大学）

大豆生田 啓友 （玉川大学）

〈バディ〉

井門 彩織 （目白大学）

大村 あかね （浦和大学）

加藤 翼 （洗足こども短期大学）

鈴木 祥子 （昭和女子大学）

高橋 優子 （洗足こども短期大学）

伊藤 路香 （洗足こども短期大学）

上田 よう子 （玉川大学）

近藤 有紀子 （十文字学園女子大学）

尾根 秀樹 （洗足こども短期大学）

星 早織 （和泉短期大学）

《乳幼児教育アドバイザー》

赤坂 榮 （元聖徳大学）

高橋 かほる （帝京短期大学）

西 智子 （元日本女子大学）

古川 由紀子 （聖徳大学短期大学部）

世田谷区教育委員会事務局
乳幼児教育・保育支援課
(乳幼児教育支援センター)

〒154-0023

世田谷区若林5-38-1

電話番号 03-6453-1531

ファクス番号 03-6453-1534

